

肢体不自由児と芸術活動

木村 基

はじめに

私は作業療法士⁽¹⁾として肢体不自由児⁽²⁾と関わっている。肢体不自由児は動くことや、自分の気持ちを人に伝えることが難しい場合が多い。心の中では伝えたいことや思いがあるが、どうしてもその表現方法が限られてしまう。日々の関わり合いの中で絵画活動を自己表現の一つとして、生み出された作品を子ども達からのメッセージだと感じ、向き合ってきた。また出来上がった作品から子どもたちの個性が見られるかの取り組みもおこなってきた。芸術活動では他者から評価をされる前に、まず自分自身が五感で感じるができるものではないかと私自身考えている。絵画や音楽、料理やダンスなど表現する手段は多種多様である。それらの活動と出会った時に肢体不自由児は限られた動きと表現行為の中で新たなイメージを生み出していく。

現在、障がい者の芸術活動について「障害者の芸術活動への支援を推進するための懇談会」(二〇一三)(以下「懇談会」)の報告書を見てみると精神障がい者や知的障がい、広汎性発達障がい児・者によるものが非常に多く占めている。その理由を考えてみると芸術活動をおこなうにあたり、身体的な制約が少ないためではないかと考えた。現在は子どもと芸術活動の取り組みは様々な形で行なわれている。それに比べて肢体不自由児と芸術活動に関する文献や研究は非常に少ない。しかし彼らは本当に芸術活動が行なえないのだろうか。身体的な制約も多い中、芸術活動をおこなう出来上がった作品に芸術的な意味を見いだすことは難しいのであろうか。私は彼らとの日々の関わりの中で、彼らが発するわずかなサインに気付けるようになってきた。日々の関わり合いの中で彼らの秘めた思いを感じ、肢体不自由児にこそ芸術活動で個性を表現する必要があると考えた。今回は芸術活動の中でも絵画活動を取り上げる。本論文の

目的は肢体不自由児にとって制作過程も含めて絵画活動は必要であるということ考察することにある。

具体的には、「二」では、障がい者と芸術の関わりについて。「二」では、子どもの芸術の関わりと、想像力を育てる大人側の関わりについて。「三」では、医療業務での芸術活動のとらえ方について。「四」、「五」では、肢体不自由児の説明から絵画活動に必要な身体面や感覚面の機能、必要な器具について説明する。またそれを踏まえての実践例を交えて報告する。「六」では、当事者からのインタビューを通して絵画活動が持つ意味について考える。「おわりに」では、肢体不自由児が表現活動を行なう上で大切なことについての提言を行う。以上の流れで今回の論を進めていく。

一、障がい者と芸術の関わり

障がい者芸術を表現する言葉として様々な言葉が使われているが、特定されたものはない。「アール・ブリュット」とは一九四〇年代、画家ジャン・デュビュツフェによって提唱された考え方で、直接的・無垢・生硬・生の芸術であるとの意味を持つ。自らを芸術家と認識することすらない、無名で慎ましい人々の作品のことで、形式と内容に獨創性があるか、制作者の社会的・心理的孤立をもとにした作品であるか、ということ厳密な基準として定めている（マクラガン、二〇一〇、四一頁）。

障がい者芸術について ABLE ART MOVEMENT プロデューサーの播磨靖夫氏は「これまでだと、だれが描いたのか、何が描いてあるのか、いかに描いてあるのかが鑑賞者の重大な関心事であった。もちろん、それらも重大なことにはちがいないが、これからは誰がどのように見たのか、という問いがますます重要になってくる。」（播磨、一九九六、七頁）と述べている。

また教育現場で重度重複障がい児に絵画活動を通して関わってきた教員たちも以下の様に述べている。「授業を展開していく上でのポイントは、彼らの作り出したものを受けとめる側、つまり我々教員の作品に対する見取り方だと思っています。」（斉藤、二〇〇三、三八―四一頁）。「数センチ数ミリ糸を持った指を移動させる。その「意思」の力が、

ここでの造形活動のすべて」であり、「彼は自分の意思の力によって、身体表現を起させた、それが彼の『表現活動』」であると捉えている。同様に、重度重複障がい児⁽³⁾の造形活動では「健全児が絵を描き、物を作ることと同じ価値をその数ミリに見出すこと」が重要であるとしている(齋藤、一〇〇四、四一―四三頁)。また、「作品となるためには、それを表現と受けとめる人が必要です。」(蒔苗、二〇〇四、五六―五七頁)と述べている。これらに関わる側が作品に対してどのように意味づけをおこなない、取り扱っていかを述べているものである。出来上がった作品を誰がどのように感じ、どのように鑑賞するかが重要だと言う点で共通した考え方であると言える。

懇談会によると障がい者の芸術活動の意義として次の様に述べられている。「障害者の芸術活動の中からは、既存の価値観にとらわれない芸術性が国内外において高い評価を受ける様な事例も数多く出てきており、障がい者が生み出す芸術作品は、これまでの芸術の評価軸に影響を与え、芸術の範囲に広がりや深まりを持たせるといふ点で、芸術文化の発展に寄与する可能性を有するものである」(厚生労働省・文化庁、二〇一三)と述べている。ただこの時点では障がい者の芸術活動は「発展に寄与する可能性を有する」にとどまっている。そのために可能性のあるものをどのように支援していくのかに関して国の施策は「裾野を広げる」と「優れた才能を伸ばす」ことの二点を挙げている。それを踏まえ、障がい者芸術を広げるための仕組み作りを行なうことの重要性を述べている。

ただ彼らが作品を発表する場合にはやはり「障がい者」の呼称が常につきまとう。また作品によっては障がい者が作製したのか健全者が作成したのか見分けがつかないことも多くある。「障がい者の」という言葉は、先入観を持って作品と接する可能性があることを忘れてはならない。

二、子どもと芸術活動

井口均の『幼児期における造形的表現過程の検討―仮説的モデル化を中心に―』によると、子どもの表現活動は生活のあり方によって大きく左右されることと述べている。「造形が誕生する生活を築く」具体的な条件として「場(空

間)、もの(材料、道具)、こと(遊び、仕事、暮らし)、ひと(安定した人間関係)の充実がポイントとなる。」(井口、一九八七、五九頁)と述べており子どもと芸術活動の出会いに関しては、やはり大人の関わりが非常に重要となる。

ただ子ども達に認知的な発達が見られてくると自由な芸術活動をする上で教育や指導という観点が入ってしまうことがある。芸術・美術は心の中から溢れ出すものを表現する意味合いが強い。そのため教育、指導という違和感を感じる人は多い。私もその一人であった。しかし大人が適切に関わることで子どもの創造性を引き出すことは可能であると考えている。その点に関して山下は「絵画表現の今日的課題」の中で論じているのでそれについて見ていきたい。子どもたちに我々大人が芸術活動を伝える場合、どのように関わればよいのか。この論文の中で三点あげられている。1・表現活動では、自分の目と手、体全体の感覚を働かせ、直接、対象とかわからせ、形や色の特徴、美しさなどを見いだし、それをとらえて表すことを大切にす。2・表現方法については、単なる方法や技術のみの押しつけ、また子どももまかせにならないよう配慮する。そして発達課題を踏まえ、思考とつながった感性を表現する手段を獲得できるようにする指導が求められる。3・表現活動は、作品を通して自分の思いや考えをもち、他者とコミュニケーションする楽しさを味わわせるとともに、「今の自分を見つめる」活動であることに気付かせる(山下、二〇〇二、三頁)。

やはり芸術活動をする場合、それまでに経験したものが反映されるということになる。大人の場合、今まで生きてきた経験をもとにして活動すること、自分の好きなものや扱いやすいものを選択することができる。しかし子どもの場合には初めて接することや体験するものに出会う場合が非常に多い。そのために芸術活動が行なえる関わり、様々なものを選択、経験できる環境が必要となってくる。

それでは子どもたちが芸術活動を行なう上で必要となってくる表現力を育てるにはどのような視点が必要なのか。山下は表現力を育てる三つの視点として、1・目的意識、2・選択、3・試行錯誤(山下、二〇〇二、三頁)をあげている⁴⁾。

この部分に関しては芸術活動に対する考え方というよりも芸術教育を行なう上で必要な視点とした方が良くあかし

れない。上記の三項目を見てみると認知的に高度な要求を必要としていることが見て取れる。芸術活動を意図して行なうのか、意図せず感情の趣くままに行なうのかで違い、子どもの認知面と運動面の成長による変化が見え隠れする部分でもあると考える。

また日々の関わりの中で表現力を育てる四つのステップとして以下の四点が上げられている。1. 「であう」、2. 「みつける」、3. 「ふかめる」、4. 「ひろげる」(山下、二〇〇二、三頁)⁽⁵⁾。私自身も日々障がいをもった子どもと関わる中で必要だと感じるものである。山下が述べる表現力を育てる三つの視点と表現力を育てる四つのステップを経験させてあげることができれば、芸術活動を行なう上で障がいの有無は問わないのではと考えている。

これらの項目を見てみると芸術活動を行なうにあたり、様々な活動との出会いや場の提供の必要性は子ども達にとって非常に重要な意味を持つ。五感で感じ、実際に体験し、経験する機会を作ることによって表現活動につながっていく。

しかし子どものアートに対して懐疑的な見方をする考えもある。ローダー・ケロッグは、大人と子どものアートの違いを当時の美術教育の現状を踏まえ次の様に述べている。「児童美術と成人の美術は異質のもの、たとえ共通点があってもそれはわずかという仮定に発する。そしておとなの絵画だけが真の美術と考えられているのである。児童の絵画は遊びであるか、あるいは将来の美的才能の約束だと考えられているのである」(ローダー・ケロッグ、一九七四、一五三頁)。しかし芸術かどうかを決めるのは鑑賞側であることが多く、それらを否定してしまうと子どもの作品、アート・ブリュットを否定することにもなりかねない。子どもの作品も大人の心を動かすことは可能だと考えている。鑑賞する側も柔軟な発想を持ち、様々な作品を受け入れることが必要となってくる。

三、医療業務での絵画活動の捉え方

中西美穂は病院内における芸術活動は四つに分けることができると述べている。1. 「芸術をつかった療法」、2. 「デザイン」、3. 「アートプロジェクト」、4. 「患者自身が芸術の表現者となる」(中西、二〇一四、九十六頁)。

医療業務では絵画活動を治療手段として用いることが多い。その場合はやはり「芸術をつかった療法」に該当する。しかし子ども達が作品を描いたことで保護者や周囲の人達の感想などが聞かれる様になると前述した中西の言う「患者自身が芸術の表現者となる」に変化する。子ども達と絵画活動を行なった当初は、保護者達も子ども達が描く絵画を「本当に子どもが描いているのか？」と批判的に見ているように感じたことがある。それは身体運動や認知面の難しさから、自分の意志で行なっているかを見極めることが難しいからではないかと考えていた。ただ難しいだけで不可能だと決めている訳ではない。やはり絵画活動の必要性を受け入れてもらうには子どもが自ら動けるようにサポートすること、描く経験の積み重ねが必要となってくる。それと併せて医療職以外の人間とも描けるように保護者や子どもと関わる他職種につなげていく必要がある。

四、肢体不自由児とは

身体に障がいがある子どものことを医療の中で肢体不自由児ということがある。肢体不自由児とは脳性麻痺と同じ意味と捉えてもよい。二〇〇四年七月、米国メリーランド州ベテスダで脳性麻痺の定義と分類に関する国際ワークショップ (Workshop in Bethesda) が開催され、脳性麻痺についての新しい定義がなされた。それは「脳性麻痺の言葉の意味するところは、運動と姿勢の発達の異常の一つの集まりを説明するものであり、活動の制限を引き起こすが、それは発生・発達しつつある胎児または乳児の脳のなかで起こった非進行性の障害に起因すると考えられる。脳性麻痺の運動障害には、感覚、認知、コミュニケーション、認識、それと／または行動、さらに／または発作性疾患が付け加わる」(Bax M, Goldstein M, Rosenbaum P, Leviton A, Paneth N, Dan B, 2005, pp. 571-576)とされている。簡単に言うと脳性麻痺は姿勢調整と運動の障がいということになる。

五、肢体不自由児と絵画活動

五十一 肢体不自由児の絵画活動に必要な要素…健常児へのアンケートから読み取れるもの

肢体不自由児への絵画活動の必要性を述べる前に、健常児が絵画活動に対してどのような考えを持っているのかを知る必要があると考えた。また子どもが絵を描くことの好きな理由は、障害の有無に関わらず全ての子どもに共通するはずである。そのため健常児の考えは障がい児にも応用できると考えた。二〇一四年から一五年にかけて子どもがいる、または保育士をしている私の知人達と連絡を取り、日常の会話の中で質問をする形でアンケートを行ってもらった。アンケート項目は次の二つである。「1. 絵を描くのは好き?」「2. なぜ好き?なぜ嫌い?」である。大人の解釈を入れない様にするために、大人からの問い掛けに対して最初に言った言葉をそのまま記載してもらった。就学前から小学校低学年の子どもも日米合わせて一三人からアンケートを取ることができた。

アンケートを見ると一三名中絵を描くことが好き八十八名、嫌い二十二名、混在型(状況により好き嫌いが分かれる)が三名であった。嫌いの中には絵を描く事は嫌いだがモノ作りは好きと答えた子が六名いた。好きな理由を分類するとだいたい以下の四つに分けることができた。1. 芸術的だからなど「観念的」なもの、2. 色塗りやリアルさの追求など「技術的」なもの、3. 絵をうまくやりたいなど「願望的」なもの、4. 好きなものが描けるからなど「表現的」なものである。

また日本人で絵を描くことが嫌い、混在型の子どもの中で一番多かった意見が「汚れることが嫌」である。絵画や芸術活動では汚れることはよくある。しかし家で行なう場合はあとの掃除を親がしないといけないため、あまり家ではできないのではなかと推測される。汚れるのを嫌うのは男児が圧倒的に多かった。また「どう描いたらいいかわからない」というものが多く、何を行うかが明確なぬりえ等枠組みがあるものなら取り組むことができるとの声が多く聞かれた。モノ作り派の子ども達はブロックや粘土で好きな形を作ることもあるが、モデルとする形がある、見本がある場合が多かった。これは「二」で山下が述べた表現力を育てる関わりが減っている、絵画活動を通じて子どもとコミュニケーションをとる人間が少ないのではないかと考えられる。やはり子どもと向き合い、創造力を引き出す関わりができる人間の存在は必要であると考える。絵画活動は自由に好きなものを描くと言うが、この結果を見ると

やみくもに自由に描かせることで絵画嫌いになってしまいう可能性があることも注意しなければならぬ。しかし絵が好きな子、モノ作りが好きな子に共通して多かったのは「出来上がってくるのが楽しい」や「好きなものが作れるから」であった。やはり子どものイメージしているものを見える形で表現する機会を提供することは芸術活動全般を行なう上で一番大切な部分となるのではないかと考えている。

この結果を踏まえると肢体不自由児と絵画活動を行なうにあたり、肢体不自由児達に対してアンケート1〜4の部分をサポートすれば絵画活動を楽しめるのかが大まかにみえてくる。楽しいと思える活動との出会い。子どもにあった描画方法や描画材など技術的な支援、絵画活動を通じて自分の作品を認めてもらいたい思い。好きな様に、思う存分描ける、汚してもかまわない環境設定、絵画活動を通して子どもと向き合う人間の存在。これらの部分に必要なサポートを提供することで彼らが絵画活動に取り組むことができ、絵画活動が彼らにとって意味ある活動になると考える。

五十一 肢体不自由児の絵画を妨げるもの

肢体不自由児が絵画活動をする場合、動きたいが上手く動けない。描きたいが描く手段がわからない。表現が行いにくいゆえに、行動することを諦めてしまうこともある。これは絵画活動の未経験や経験不足につながる。また動きにくさから行動範囲が限られてしまうため同じ範囲での生活が増えてしまう。「意欲」、「感情」を表出する経験の不足につながる。絵画活動との出会いを助け、数多くの経験を積み重ねていくことは大人としての重要な役割の一つとなる。肢体不自由児の場合、障がいが重度になるにつれ、子ども達のわずかな動きで描く方法を模索するよりも、介助者である大人が子ども達の手を持ち、大人の意思で動かすことが多いのが現状である。出来上がった作品はもろろん子どもの名前で展示される。時間的な制約もあるので仕方ないのだろう。大人の仕事の一環で描かせる絵画では子どもらしさは表現できない。ただ介助者との関係性の中で子どもものわずかな動きを感じ取りながら手を持ちサポートすることは必要になることがある。やはり無理やり動かされている場合は寝てしまうことも多い。

ただ子ども達が絵画活動を行う場合、就学後は絵画教室や学校の授業の一環で行なわれることが多くなり、出来上がった作品に対して順序付けが行なわれることも増えてくる。「上手く描けないから」、「上手くできないから」と上手く描けないことが恥ずかしいことと感じることも多くなる。そのため絵画活動への意欲が削がれてしまうことになってしまう。幼少期の様に描く行為自体が賞賛されることも減ってくる。意味の分からないもの、人に理解されないものも否定されやすくなる。そこに否定的な評価がある場合は尚更だ。就学前ではどうか。画用紙という枠内に収まりきれない思いや運動、感情のコントロールの難しさもある。また絵画や表現行為は時とし「汚れ」を伴う。日常の生活の中で「汚れ」を伴うことは大人の手を煩わすことになるため絵画活動そのものを行なう機会も減ってしまう。しかし描く、創作することで表現したいという子どもの思いをサポートすることは必要である。

五二二 絵画活動に必要な身体機能

絵画活動を行なうために必要だと思われる代表的な身体機能は以下のものがある。

a. 姿勢の安定

絵画活動をするにあたり、見ること、手を使うこと、体を動かすことの基盤となるのが姿勢である。同じ姿勢を保ちつづける。手を使っても姿勢が崩れない。頭部を同じ場所で保ちつづけるためにも姿勢の安定は必要不可欠となる。私たちは坐骨を椅子の座面につけ、足底を床につけることで体を上に伸ばして座ることができる。そのようにすることで手が使いやすくなる。目が使いやすくなるのである。また良い姿勢で活動することで長時間活動が行なえるばかりではなく、活動後の疲労度もかわってくる。

肢体不自由児の場合は一人で坐れない、足が床に接地しない、体幹が安定しないことも多い。そのため子どもにあった椅子や姿勢を安定させる設定をおこなわないサポートしていく。

b. 見ること…視覚機能

目の機能には大きく分けて二つある。見えるか見えないか、どの程度見えているのかの「視力」。どのように見えているのかの「視知覚」がある。絵を描くに当りまずは画面を見る必要がある。また画面だけでなく画材を持つ手元を見る、次に使う画材を見るなど色々なところに気を配って活動をする必要がある。頭部が動く、頸部が安定しないと落ちついて見ることはできない。頭部が安定するようになり、初めて眼球だけが動かせる様になるのである。肢体不自由児の場合は見ることの難しさを持ち合わせていることが多い。また重度重複障がい児になると「視知覚」に加えて「視力」にも問題がある場合もあり配慮が必要となってくる。姿勢の項目でも述べたが肢体不自由児の中には頭部の安定が見られないために、眼球が上手く動かせないこともありこちらでも配慮が必要となる。

c. 上肢機能

私たちは手を使って道具を持つことができる。また道具の種類に合わせて持ち方を変えたり、使用方法を変化させている。持つ以外に握る、つまむ、叩く、こねる、丸めるなど、様々な動きができる。それにより様々な形が生み出せる。道具を使わなくても、指を用いて筆のように描いたり、粘土で使用するへらのような使い方をすることも可能で用途に合わせて変化させることができる。しかし使い慣れた道具や愛用の道具から他人の道具や新しい道具を使う場合は自分の手に馴染まない、クセなどの微妙な変化を読み取ることができるほど、敏感な感覚機能も持ち合わせている。

肢体不自由児の場合、肩が安定しないので上肢が持ち上がらない、手指が上手く動かせないため道具が握れない、指を握り込み過ぎて開かないなどがあり、彼らの手の機能に合わせた道具や画材の選択が重要になってくる。

d. 絵画道具

私たちは数多くある画材を、作品に合わせて使い分けることができる。長さや太さ、重さや書き心地など、画材

に対してこだわりがある場合も少なくない。先ほどの上肢機能でも説明した様に肢体不自由児の場合は手の機能に合わせて道具を選択する必要がある。持ち方のバリエーションが限られているため、一つの持ち方で様々な画材を使用することを考える必要がでてくる。そのために必要なものが自助具・ペンシルホルダー(写真1)といわれるものである。私は支持体に対して画材が常に同じ角度であったことで継続して線がひけることにつながると考えた。そのため子どもの手に合わせて熱可塑性プラスチックを用いて制作している(写真2、3)。また肢体不自由児へ用いた描画道具に関して「描画の道具として、わずかな力で線の強弱、濃淡、擦れ、幅に変化が表れやすい筆ペンをを用い、全員が把持困難であったため特性のペンシルグリップを作成した。」(木村、二〇一一、二頁)とすでに述べているように、描画道具を提供する上で子ども達それぞれの特徴を知っておく必要がある。

五十四 肢体不自由児に対するサポート

肢体不自由児の場合、姿勢調整や運動のコントロールが難しく、頭を支えること、自分の手を挙げること、手元を見ながら絵を描くことが上手く行なえないことがある。私たち健常者と言われる人達は特にそれらを意識することなく日々を過ごしている。彼らの安定しにくい頸や体幹を支える、手など動かしにくい部分をサポートすることで、自ら動いて活動できることに気づいてもらう。そして動かしやすくなった身体を用いて絵画や表現活動を行っていく。ゆっくりではあるが手を動かす等の変化は見られる様になる。また身体各部を動かすためには時間がかかるため、介助者はじっくりと待つ必要がある。私は重症心身障がい児・者との絵画活動を通して以下の様に述べた。

「作業療法士は、車椅子上やベッド上等、利用者に応じた様々な姿勢の中で、手の重さを助け自発運動の表出を待った。紙を提示するにあたり子どもに応じて斜面台を用い、手元が見えにくい子どもには描画道具を視野内に入れるなど環境面でも個別に対応した。」(木村、二〇一一、二頁)。

絵画活動の中で介助者が子どもの手を持ち、無理矢理動かして描かせるものは絵画活動とは言わない。絵画活動か

ら得られる様々な刺激を感じ取り、次の動きにつなげていくからである。活動を通してできあがった作品に対し保護者から褒められる、声をかけられる経験を通して少しずつではあるが彼らは再び絵画活動に取り組めるようになっていく。最終的には特定の人物とだけでなく、様々な人達との関わりの中で取り組めることが望ましい。介助方法や環境設定も他者でもおこなえる様にして誰とでも、どこでも絵画活動ができるように関わっていくことが必要である。次に実際に絵画活動に取り組んだ子ども達の実践報告を記載する。

五―四―一 実例報告

絵画活動に取り組んだ重度な四肢麻痺児二名ついて身体的特徴、使用用具、介助方法などを入れて報告する。

実例 1) (写真 4、5)

Aさん.. 四歳(調査当時)

【身体的特徴】

身体の筋緊張が高まりにくく、自ら身体を動かすににくい。また未定頸で身体を自分で支えにくいため、手が使いにくい。

【意思表示】

絵画をするか聞くと口を開ける、笑顔になるなどの意思表示がある。また絵画をしない時は動かない、返事をしない。絵画が終わる時は腕を止めたまま動かない、腕を下に降ろすなどをする。また作品が完成後、お母さんに褒められると笑う。

【介助方法】

頭部や体幹を支え、手を支えると手元を注目しながらペンを動かすことができる。また斜面台を手掛かりとして手を動かしていく。またペンの動く方向に合わせて頭部を動かすとペンの動きを目で追いかけることもでき

る。

【使用道具】

一・斜面台(写真6)

手元を見易くするためと手を動かす手掛かりとして使用。また斜面台に手を乗せても動かない様にすべり止めシート(写真7)も合わせて使用。

二・ペンシルホルダー(写真8、9)

鉛筆が自分で持てないため、紙に対してペン先が垂直に触れるものを制作。また不意に手を離してもペンが落ちない様にするために手とペンシルグリップを伸縮性のあるゴムで巻いている。

三・マジック

わずかな力でも紙に手を動かした軌跡が残り易いものとして選択。他にも指筆なども使用した(写真10)。

【作品の特徴】

当初は殴り書きが多かったが、継続していく中で丸に近いもの、縦、横など連続した長い線、下から上への線が描ける様になっている。

【備考】

マジックでの活動ではあったが、描画道具を筆や絵の具に置き換えることで作品の完成度や手を動かすことで描かれる線の変化を感じ取れると考えている。変化を感じ取り、運動を再現することを繰り返すことで彼なりの作品ができあがっていく。

実例2)(写真11、12)

Bさん・五歳(調査当時)

【身体的特徴】

一人で坐れないものの、支えがあると頸を動かす、手を動かすことができる。また動こうとすると手を握り込んでしまい、開くことが難しい。

【意思表示】

問い掛けに対して声を出す、笑顔になるなどで意思表示が可能。嫌な時も表情で読み取ることができる。色を変更したい時は手を止め、問いかけると返事をする。

【介助方法】

お尻がベンチから落ちない様に筆者が両大腿部ではさみ支えている。また筆者の手で頸部と方を支え、体幹が前に崩れない様にサポートしている。そのようにすることで、自分の手の動きを見ながら描画活動をおこなうことができている。また色を選択する時は本人の見えやすい位置にクレパスを提示し、色名を呼称しながら確認していく。

【使用道具】

一・斜面台

手元を見易くするため。手を乗せることで体幹を支えることができる。すべり止めシートも合わせて使用。

二・ペンシルホルダー

描画道具を持つことができるが、紙に対してペン先を垂直に持っていけないために使用。また不意に手を離してもペンが落ちない様にするために手とペンシルグリップを伸縮性のあるゴムで巻いている。

三・クレパス

紙の上を油分で滑る様な感覚を感じてもらいたかったこと、複数の色を選択しながらおこなえることから使用。

四・画用紙

白の支持体は反射光が強いため、レンガ色を使用。

【作品の特徴】

殴り書きではあるものの、自分の手の動きを確認しながら描いている。また色を複数選択するので華やかな仕上がりになる。

私ははじめて彼らを見た時、絵画活動が行えるだろうかかと悩んだ。しかし彼らも動き、必死に私達に言葉を発していることに気づいた。活動する手段が限られているだけで、描けないわけではないわけではなかったのである。サポートする上で彼らのわずかな動きを探り、その動きをいかに芸術活動につなげていくか。これがこれからの支援のあり方として求められるのではないだろうか。

五十五 地域における肢体不自由児に対する芸術活動の取り組み

今まで、地域において肢体不自由児達が芸術活動を行う場が非常に少なかった。その理由として1・医療的な処置があり、わずかな反応しか見られない場合がある。そのためどの様に芸術活動をサポートするか難しく、活動時の設定が個人で異なり介助者が常に必要など個別性が高い。2・保護者に家で絵画活動を行わない理由を聞くと「汚れてしまう」「片付けが大変」など環境に関するものが多い。しかし子ども達に経験させてあげたいと思っている保護者は多かった。3・リハビリテーションや教育、福祉の現場ではスタッフと子どもが関わる時間が長く、お母さんと子どもがじっくりと活動を通して向き合う時間が非常に少ない。上記の理由から私は二〇一七年一月より東大阪市のスペースを借りて重度な障害を持つ子どもと家族の芸術活動の場「Line Project」⁽⁶⁾を主宰している。活動のコンセプトは四つである。1・全ての子どもにアートを。2・様々な素材で作品を生み出す。3・医療、福祉、教育が目的ではない活動。4・生活の中にアート、とした。

活動は毎月第四土曜日の午前と午後の二部制としている。毎月平均して八組程度の御家族に参加して頂いている。一月から三月までを体験会として四月から九月までを第一クルールの開始とした。毎月子ども達と御家族が取り組みやすいプログラム⁽⁷⁾を考え、作品を制作している。前半は画用紙に手や身体の一部を使用して、手に絵の具がつくこと

を嫌う子は道具を使用して作品を描く(写真13)。後半は毎月のテーマに応じて作品を制作しており、完成した作品は自宅に持ち帰ってもらっている(写真14)。プログラムを分けてはいるが子どもの体力を考えてテーマ活動のみをする、絵画も行うなど進め方は各家族に応じて柔軟に対応している。またサポートが必要な場合はスタッフがお手伝いをする。運営時間は二時間としているが子ども達の体力のこともあり、休憩は自由に取ってもらっている。運営は参加費で行っている。長期的に活動を継続すること、資金的に自立することを目指した運営を行なっている。

六、当事者が語る芸術活動への思い

ここで紹介したいのは高岡哲哉氏である。彼は一九八四年生まれで脳性麻痺の当事者でもある。彼は長年書道に取り組んでおり(写真15、16)数多くの作品展でも受賞をしている。また地元奈良を始め、数多くの場所で書道作品展を開催し商品のパッケージデザインも数多く手がけている。高岡氏は作品集の中で書道に対して詩を書いていく(8)。

詩を読むと書道を通じて作品を書くだけでなく、自分の思いを表現する。作品を通じて他者と関わることができる。

外部との接点を持つことができるなど書道が本人に与える影響が大きいことがわかる。また現在の高岡氏の書道に対する思いをお聞きすることができた(9)。やはり高岡氏にとって書道は「仕事」だということである。この言葉を聞いて私は趣味や余暇活動ではなく、生きる糧となっているように感じた。しかし書道の展覧会を行なったときの感想として「はじめは何で僕の書を見て感動してくれるのが何でかな？」と感じたとのことである。高岡氏としては自分の思いを全力で書道で表現していたのではないだろうか。そのため、人に評価されたいとの思いを持って書道に取り組んだ訳ではなかった様に思う。しかし定期的に作品展をする中で「作品展をするたびに皆様が感動して下さり、励まされる、声をかけていただくと哲也の方が嬉しくてまた頑張ろうと思うそうです。」とお母様が話された。展覧会を開催することで自分の作品が沢山のの人に影響を与えていることに気づく。それをきっかけとして沢山の人のつながりを得た。それがモチベーションとなり高岡氏は現在も素晴らしい作品を生み出し続けている。

代わりに（肢体不自由児が描くということ）

肢体不自由児が絵画活動をおこなう上で様々な制約がある。しかし表現すること、描くことが楽しいと感じることができれば、自ら動くはずである。表現方法が限られているだけで、描けない訳ではないからだ。絵具の感触に気づき、手を動かすことで線が描けることに気づき、繰り返し手を動かす。また色が着く、画面が変化する等の視覚的な変化に気づき、他者とコミュニケーションを取りながら絵画活動の経験等を積み重ねていく。限られた表現手段ではあるが、描かれた線は彼らが生み出したイメージそのものだと考えている。子ども達と絵画活動を継続しておこなうと時間が経つ中で少しずつではあるが確実に変化が見られてくる。そのため継続して絵画活動に取り組むことも重要なことである。絵画を初めた直後は、母親も子ども自身が絵を描く姿を見て驚くことが多く見られる。ただ絵画活動を継続して行くと、座り方や体の支え方をサポートはするものの、子ども達が絵を描き始めると自分で描いているか、介助者に描かされているかは母親の目から見ると明らかにわかる。障がいが重度な場合でもYes、Noの判断や意思表出は読み取れる。どのような色や画材を使用するかは聞けば答えることもある。様々な描画材を用いることで作品の世界は広がり、他者が作品に対して抱く印象も劇的に変化する。アンケートでも表現することに楽しさを見出している子が多い様に、肢体不自由児も様々なことを感じ、表現することを望んでいる。もちろん肢体不自由児の全てが絵画を好むわけではない。ただ他者に対し自分の考えをわかって欲しいという思いは皆同じだ。それは私たちと何ら変わらない。子どもたちが絵を描きたいという純粋な意欲や感情から生み出された作品もやはりアートと呼ばれたとしても何ら不思議はない。

肢体不自由児が描く絵画はどちらかと言えば殴り書きに近く、一本の線だけに見えるかもしれない。また作品を見ただけでは何を書いているかもわからないこともある。しかし上手く作品を描くことが目的でないのであれば、また誰もがわかる絵画である必要はないと考えている。彼らが描いた作品に対して意味付けをし、その人が描いた作品と

して尊重することが大切である。継続した関わり合いの中で彼らの個性は表現され始める。子ども達の内なる思いを表現することこそ意味があるのではないだろうか。全ての文字も絵画も一本の線から始まる。彼らが生み出した作品を通して私たちが彼らと関わって行くことができれば、また芸術の可能性を受けとめることができれば、肢体不自由児にとって絵画活動は大きな意味を持ち始めるはずである。

今回の論文を通して彼らの心を見える形で表現することの必要性を改めて感じた。やはり肢体不自由児にも絵画活動は必要なのである。今後も彼らとの絵画活動を通して絵画活動が持つ可能性と表現することの意味を探ってみたい。

追記

今回の論文は、画像使用、作品使用、インタビューやアンケートなど、一五〇名以上の方々と複数の団体に協力して頂いた。この中の誰一人が欠けても今回の論文は完成しなかったと思う。本当に皆様ありがとうございました。

註

(1) 作業療法士 (Occupational Therapist : OT)。日本作業療法士協会は作業療法を「身体または精神に障がいのある者、またはそれが予測される者に対して、その主体的な生活の獲得を図るため、諸機能の回復・維持および開発を促す作業活動を用いて行う治療・指導および援助を行うこと」と定義している。

(2) 肢体不自由児とは脳性麻痺とも言われ、身体に障がいがあり、運動や姿勢調整の難しさを持つ子どもの総称である。

1. 障がいされた筋群による分類

○四肢麻痺

全身の筋群に影響。体幹、上肢、両下肢がうまく動かない。顔面の筋群も影響を受ける。手指を使うこと、身体を大きく動かすことに加え、食事や会話の難しさがある。重度な四肢麻痺では日常生活の多くの活動で難しさが見られる。

○両麻痺

主として両下肢がうまく動かせない。他の子どもよりもゆっくりだが、座ることに必要なバランスを獲得していく。立つことや歩くことは麻痺の影響をうけるので、うまく行なえないことが多い。

○片麻痺

体の片側だけ麻痺の影響を受ける。

○アテトーゼ型

体がゆっくりとねじれる動きが見られ、自分の運動をコントロールすることが難しくなる。

○失調型

動こうとすると、不安定で揺れてしまうため自分の運動をコントロールすることが難しい。

2・脳の損傷部位による分類

○痙直型

筋肉の緊張が強く、思う様に身体を動かしにくい。

脳性麻痺と言っても様々なタイプがあり、子ども一人ひとりがそれぞれの難しさを抱えている。そのため私たちには子どもにも応じたサポートや配慮が求められる。

- (3) 教育の分野では「重度・重複障害」が用いられているが、医療では「重症心身障害」を用いている。重症心身障害とは身体と知的な難しさに加えて、生命維持のための機能も障害されることが多く、呼吸、摂食、循環、排泄、体温調節、睡眠リズム、成長、免疫力などにも異常を来しやすい。その結果、二次的に起こる各種感染症、消化管の出血や閉塞、貧血、肺炎、膀胱炎、骨折などの各種合併症への対応も必要である。

- (4) 1・目的意識…子ども自身がやるべきことはつきりと分かるということは、活動の大前提である。2・選択…自分の思いにぴったりとくる描画材を選択する。3・試行錯誤…試行錯誤によって新しい発見があったり、失敗への怖さを取り除いたりすることができる。(山下、二〇〇二、三頁)

- (5) 1・「であう」…自分のイメージを意識した表現方法を模索し、様々な描画材を使って表現していく。2・「みつける」…参考作品の鑑賞を基に、自分の世界をふくらませるための手立てとして、短文を書きラフスケッチを描いてイメージを広げていく。3・「ふかめる」…自分の思いを追究し、自分の表現を乗り越え、新しい自分を見付けるといった試行錯誤をしながら自分の絵を描く。4・「ひろげる」…鑑賞を通して作品のよさを見付け、自分の絵と違う表現方法を学ぶ。(山下、二〇〇二、三頁)

- (6) 障がいの有無に関わらず、すべての子どもにも芸術活動が必要だと考えています。文字も絵画もすべては一本の線から始まります。子ども自身が作品を生み出せる、家族で兄弟で芸術活動が楽しめる。そして新たな世界が発見できる、そんな芸術活動と場を作る取り組みをするのがLine Project ｴ｡｡｡

(7) 一月…手帳の表紙を作ろう。二月…トートバッグを作ろう。三月…タンブラーを作ろう。四月…砂絵。五月…積み木オブジェを作ろう。六月…ビニール傘に絵を描こう。七月…フアブリックを部屋に飾ろう。八月…オリジナルTシャツを作ろう。九月…大きな紙に描いてみよう。

(8) 『サッカーと書道は僕の仕事』

サッカーは
練習をして
試合の時は
どんなプレーをするか
考えてゴールを決めます

書道のある日は

書くモードで

先生を待っています

自分の思っている

字が書けた時は

嬉しいです

作品展をする時は

みんなが観に来てくれるのが

楽しみです

高岡哲哉

(哲也作品集Ⅱ、二〇二二、六三頁)

(9) 高岡哲也氏…二〇一五年四月…高岡哲也書道作品展(奈良県大和郡山市)。十二時～十三時 一名で実施。二〇一五年十二月…高岡哲也書道作品展(京都市中京区)。十三時～十四時 一名で実施。二〇一五年九月…高岡哲也氏お母さんとのメールインタビューにて実施。

引用文献

- ・厚生労働省・文化庁『障害者の芸術活動への支援を推進するための懇親会』、二〇一三年
- ・デイヴィッド・マクラガン『アウトサイダー・アート』、青土社、二〇一二年
- ・播磨靖夫『ABLE ART 魂の芸術家たちの現在』、財団法人たんぼの家、一九九六年
- ・齋藤武博「P・ドライポイント2002」『教育美術738』、教育美術振興会、二〇〇三年
- ・齋藤武博「その手がかむもの肢体不自由児の造形活動」『教育美術742』、教育美術振興会、二〇〇四年
- ・蒔苗正樹「表現することの原点に向かって」『教育美術745』、教育美術振興会、五六、五八頁、二〇〇四年
- ・井口均『幼児期における造形的表現過程の検討―仮説的モデル化を中心に―』、長崎大学教育学部教育科学研究報告、一九八七年
- ・山下裕文『自分らしさが輝く表現活動の在り方―見る目、感じる心をはぐくむ絵画表現を求めて―』、美術教育、二〇〇二年
- ・ローダー・ケロッグ『児童画の発達過程―なぐり描きからピクチャアへ』、黎明書房、一九七一年
- ・中西美穂『病院のアート 医療現場の再生と未来』、生活書院、二〇一四年、九六―一二六頁
- ・Bax M, Goldstein M, Rosenbaum P, Leviton A, Paneth N, Dan B, "Proposed definition and classification of cerebral palsy, April 2005.", *Dev Med Child Neurol* 47, pp. 571-576.
- ・木村基『重症心身障害児病棟における芸術活動…絵画を通して個性を表現する取り組みの報告』、日本作業療法学会、埼玉、二〇一一年



写真1 通常の鉛筆に近い持ち方ができる鉛筆ホルダー（筆者撮影：2015年）



写真2、3 熱可塑性プラスチック
この素材はお湯につけるとやわらかくなる。それを用いて子どもに合わせて道具を作成する。

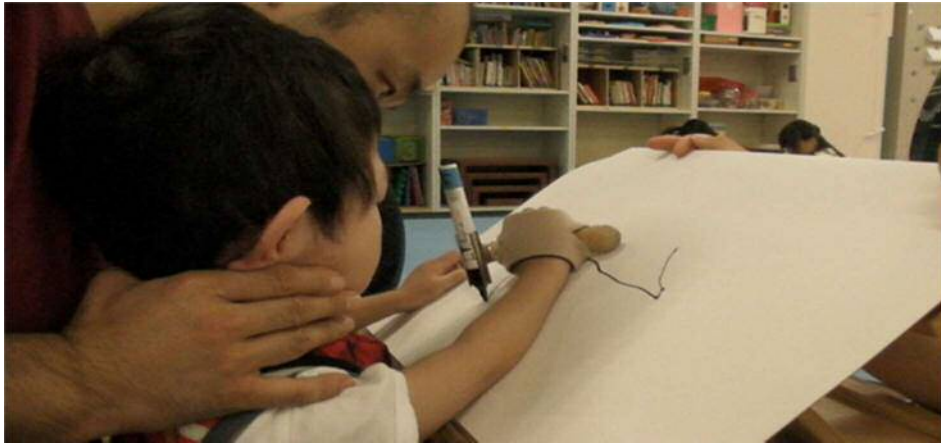


写真4：Aさん（筆者撮影：2012年）



写真5：Aさん（筆者撮影：2012年）



写真6 斜面台
支持体に角度をつけて見易くする。正面を見ることになるので姿勢の崩れが抑えられる。

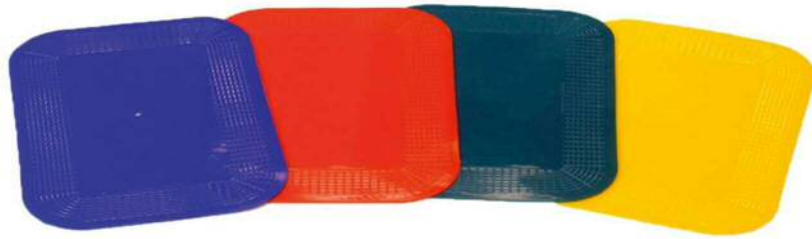


写真7 すべり止めシート
斜面台とテーブル、支持体とテーブルの間に敷くことで前方に力を加えても動かなくなる。

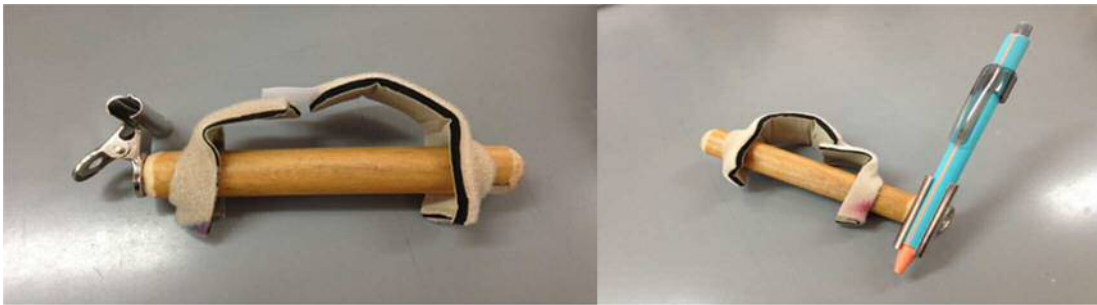


写真8、9 指が動かしにくい時に用いる描画用ホルダー（筆者作成）



写真10
握ることが難しい場合に指に装着して使用する筆
墨運堂：「ゆび筆」



写真 11 : B さん (筆者撮影 : 2012 年)



写真 12 : B さん (筆者撮影 : 2012 年)



写真 13
手に絵具をつけて描く(筆者撮影:2017年)



写真14 5月の積み木オブジェを作ろう (筆者撮影:2017年)



写真15
持ちやすい様に工夫された筆
(筆者撮影:2015年5月)

写真16
奈良県大和郡山市 東隅櫓ギャラリー
(筆者撮影:2015年5月)

